

# 利尿剤

# βブロッカー SGLT2阻害剤

総務省の調べによる

と、7月3日までの1週間で熱中症による救急搬送数は全国で2918人。前年同期の540人の5倍超となり、早くも熱中症シーズンに突入だ。熱中症は脱水症状により体内に熱がこもり、体温の急上昇に伴って多臓器不全となり、最悪死ぬこともある怖い病気だ。水分の調節がしづらい乳幼児や高齢者になりやすいといわれるが、薬を飲んでる病気が持ちの中年も要注意。どんな病気と薬がヤバイのか？

「高血圧や心臓が弱い人で、利尿剤を飲んでいれば熱中症にとても気を配らなくてはなりません」  
こう言うのは北品川藤クリニック(東京・

## 救急搬送は昨年の5倍以上

北品川)の石原藤樹院 とうではない。長た。高血圧や心臓病「患者さんの多くは、と熱中症とは、一見、普段から医師に減塩をとうとして血液量が増ります」(石原院長) 彼らは普段から、脱水

分を取り過ぎると、血の浸透圧を一定に保ちろん、血液量が増えれば心臓に負担がかかります」(石原院長) これら

の壁面に圧力がかかり、血圧が高くなるからです。もむ。血液からさらに水分を抜いて血液量を減らすためだ。つまり、脱水状態にあるのだ。

「風邪で熱があったら、下痢で脱水状態にある場合は熱中症には気を付けましょう。と液中の余分な糖分を尿と一緒に排出させるこの薬は、尿量を増加させ、脱水症状を起しませんが、発汗作用を抑やすいのです」(辛院長)

# 熱中症を招きやすい 病気と薬

こんな人が炎天下の野外や蒸し暑い室内などには、短時間で熱中症になるのは当然だ。腎臓が弱く、利尿剤を飲んでる人も同じだ。  
「利尿剤ではなく『βブロッカー』という薬を飲んでる人も注意が必要です。この薬は(院長)

「利尿剤ではなく『βブロッカー』という薬を飲んでる人も注意が必要です。この薬は(院長)

「神経障害で暑さを感じにくくなっているうただでさえ、糖尿病の予、暑さも感じにくければ、熱中症が進行するまで気付かれません」(辛院長) ほかに注意すべき病気や薬は多い。薬剤師の青島周一氏が言

「風邪で熱があったら、下痢で脱水状態にある場合は熱中症には気を付けましょう。と液中の余分な糖分を尿と一緒に排出させるこの薬は、尿量を増加させ、脱水症状を起しませんが、発汗作用を抑やすいのです」(辛院長)



「話題の新薬『SGLT2阻害剤』はとくに「抗コリン作用」と一緒に排出させるこの薬は、尿量を増加させ、脱水症状を起しませんが、発汗作用を抑やすいのです」(辛院長)

「風邪で熱があったら、下痢で脱水状態にある場合は熱中症には気を付けましょう。と液中の余分な糖分を尿と一緒に排出させるこの薬は、尿量を増加させ、脱水症状を起しませんが、発汗作用を抑やすいのです」(辛院長)